



(2021 年 7 月 30 日発行)

日本口腔顔面痛学会 理事長 松香芳三

広報委員会委員長 井川 雅子

今回より新たな News Letter 特集号としまして、これまで口腔顔面痛の分野を牽引されてきた当学会名誉会員の先生方に、学会を受け継ぐ会員の皆様に向けてのメッセージを兼ねたエッセイの執筆をお願いいたしました。第一回は、口腔顔面痛学の創生期に米国ケンタッキー大学の Okeson 教授の下で学び、本邦の顎関節症と口腔顔面痛の進歩に多大な貢献をされた矢谷博文先生にご寄稿いただきました。矢谷先生の足跡と、大変興味深い症例をご堪能ください。

矢谷博文先生

【はじめに】

タイトルに legend などという大仰な単語が使われており、執筆の依頼を受けていいものかどうか悩みましたが、依頼をしていただけるうちが花だと思い直し、引き受けさせていただきました。以下に、私の 40 年以上にわたる臨床の歴史を振り返り、思いつくままに綴ってみたいと思います。少しでも興味をもっていただけたら幸いです。

【口腔顔面痛との出会い・口腔顔面痛の世界に入ったきっかけ】

広島大学院 4 年目 (1983 年) の 5 月に主任教授の濱田泰三先生のカバン持ちとしてオランダで行われた Store Kro Club (今から約 60 年前に触診法で有名な W.D. Krogh-Poulsen, 筋肉位の提唱で知られた N. Brill, 部分床義歯学の J. Osborne の 3 名がデンマーク王室の夏の離宮所在地 Fredensborg にある Store Kro “大きな館の意” というホテルに集まって設立を決めた) というクローズドな顎機能系の国際学会に参加し、そのあと 3 週間をかけてヨーロッパの有名歯学部や歯科大学を見学して回る機会を得たことです。学会には普段論文でしか名前を目にすることのない顎機能系で著名な先生方が綺羅星のごとく参加されており、大変に興味をもちました。学会終了後、デンマークの Royal Dental College of Copenhagen (無歯顎顎堤の経年変化の研究で有名な Prof. Tallgren), 続いてスウェーデンの Uppsala University (運動単位の mapping で有名な Prof. Stålberg) と University of Göteborg (紹介するまでもない Prof. Gunnar Carlsson), イギリスへ渡って Dundee University (時のオピニオンリーダーであった Prof. Robert Yemm) を歴訪しました。当時は今のようインターネットがある訳ではなく、旅程はすべて手紙をやり取りして決めました。夫婦で訪ねたこともよかったのですが、どこへ行っても歓待を受け、その心の広さに感動しました。この 3 週間の経験は私に決定的影響を与え、アカデミアの魅力を大いに感じ、しばらくは大学で生きていこうと決めました。

【留学の経験から学んだこと】

1995 年 10 月に文部省在外研究員の資格を得て、米国ケンタッキー大学歯学部 Orofacial Pain Center に家族とともに留学する機会を得ました。Director は皆様良くご存じの Jeffrey Okeson 教授で、現在も現役です。彼は、若くして「Management of Temporomandibular Disorders and Occlusion」(現在、第 8 巻!) という

世界で一番売れている顎関節症の名著を著わし、以来今日まで顎関節症・口腔顔面痛の世界的リーダーの一人であることはご存じの通りです。私が留学していた 1990 年代半ばは、ちょうど顎関節症の治療法に対する考え方が変遷していく頃でした。すなわち、American Academy of Orofacial Pain (AAOP) などのアカデミアが中心となり、顎関節症の治療概念は解剖学的な正常構造を取り戻すことを目標とする考え方 (DOS) から、解剖学的に正常ではなくても患者の訴えである痛みと顎機能障害を除去することをよしとするという患者中心の考え方 (POS) に変遷していきました。私は留学中にそのことを学び、留学前の 10 年間全力で傾倒していた円板整位療法の正当性に疑問を抱くようになりました。ケンタッキーでは、Okeson 教授が保存療法を、臨床心理学を専門とする Carlson 教授が physical self-regulation を担当して二人三脚で顎関節症・口腔顔面痛の治療に当たっており、こうした multidisciplinary approach がきわめて有効であることを学んで 1997 年 7 月に帰国しました。帰国後、私は円板整位療法と決別し、患者に対する生活指導を重視し、薬物療法、理学療法、特に運動療法、アプライアンス療法などの可逆的保存療法主体へと治療法の転換を図り、現在に至っています。信念をもって行ってきた円板整位療法を捨てることは容易ではありませんでしたが、Okeson 教授、Carlson 教授という良き師に恵まれたこと、留学中は雑用がなく、自分のやっていることを根本から見直す時間がたっぷりあったことで、気づきを得ることができました。このことは留学がもたらした僥倖でした。

【印象深い出来事、思い出の症例】

(症例 1) 実は智歯周囲炎だった

70 歳代男性。左側の顎関節付近が痛いとのこと。弱い自発痛があり、大開口すると痛みが増すという。わずかな開口制限も認める。上下顎無歯顎で、全部床義歯を使用していたため、パノラマエックス線写真を撮影せず。MRI も導入前の時代。自発痛があるというのがちょっと引っかかったが、顎関節痛と診断。顎関節の安静を意図して夜間の義歯装着と義歯の上から作製したオーラルアプライアンスの使用を指示して経過をみたが、一向によくならず。外側翼突筋の圧痛を調べようと、義歯をはずして上顎結節の後外方を圧迫したところ、指先ではなく上顎結節部が痛いという。うん？と思ってミラーで上顎結節部を観察したところ、頬側斜面に 1mm 径くらいの小さな穴が開いていることに気づいた。ひょっとしてと、探針でその穴から中を探るとコツっと固いものに当たった！ここで初めてパノラマエックス線撮影して上顎結節部に埋伏智歯があることを確認。抜歯するとすぐに症状が消失した。全部床義歯装着者であっても智歯周囲炎は起こることがあるという貴重な教訓を得た症例であった。

(症例 2) 知らない病気はそれと診断できない

50 歳代の女性。左側顎関節部の大開口時痛、開口障害、下顎頭運動制限など非復位性関節円板前方転位を思わせる臨床症状を呈していた。非復位性関節円板前方転位と診断して開口練習、顎関節可動化訓練、アプライアンス療法などを実施したが、よくならないため対応に苦慮していたところにちょうど MRI が放射線科に設置されて撮影が可能になった。そこで早速当該顎関節の MRI をオーダー。撮影された MR 像を見て驚いた。そこにはこれまでに見たことのない異常像が写っていたからである。それが何なのか見当もつかなかった。そこで、その頃日本顎関節学会学術大会の夜に行われていた若手の勉強会で症例提示をすることにした。皆さんにその MRI を見ていただいたところ、口腔外科系の先生方から、これは滑膜性骨軟骨腫症という顎関節疾患であると即答されてしまい、ショックを受けた。当時、私は恥ずかしいことにその疾患のことを全く知らなかったからである。我師 Jeffrey Okeson がよく口にする格言がある。‘You can never diagnose something you have never heard about.’

(症例 3) 咀嚼筋痛障害の発症原因、それだ！！

画家でイラストレーターの若い女性が来院。主訴は両あごの痛み。両こめかみも痛い、一番痛いのは舌の奥のほうとのこと。これまでにネットで検索していくつかの病院を受診したが、どこへ行っても満足な治療効果は得られなかった。複数の耳鼻科でのどには異常は発見されず。アプライアンス療法と開口ストレッチ指導によりこめかみの痛みは軽減するも舌の奥のほうの痛みには効果なし。舌の筋痛が疑われたが、原因が定かではないまま数か月が経過。一日のうちかなりの時間キャンバスに向かって絵を描いているとのことで、何か絵に関係した舌の **over-use** があるはずとしつこく問診。次の来院時、絵を描いているとき、特に細密な筆遣いをしているときにギュッと舌を縦に丸めて口蓋にずっと強く押し当てていると報告。「それだ！」と私。その舌癖を矯正するよう指導。時間はかかったが、のどの痛みは消失し、大変に感謝された。

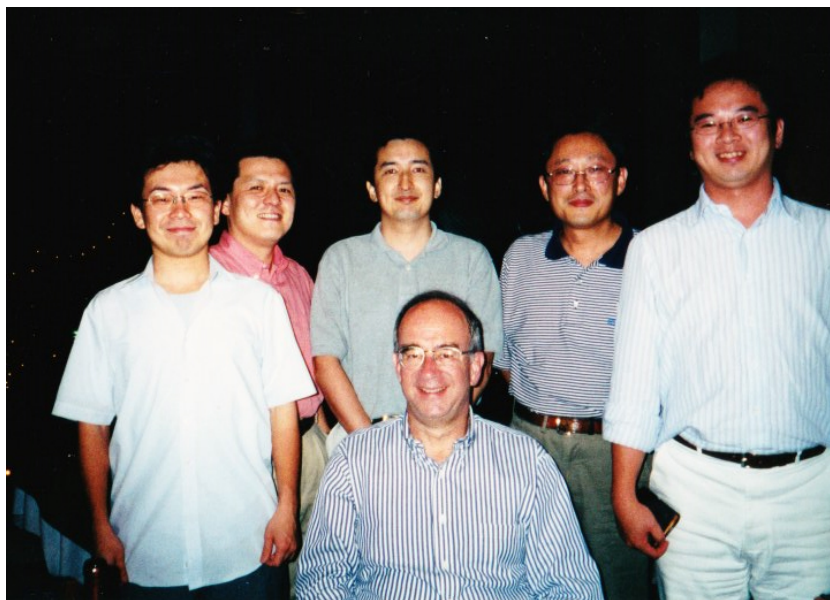
(症例 4) 先生、口ちゃんと開いてますよ！

ある日、中学生の女の子が母親に伴われて来院した。口がほとんど開かないという。診察すると開口量は 20mm 弱。しかもきわめて著しい **hard end feel**。しかし顎関節痛はない。MRI 導入前で、断層 X 線写真を撮影したが、下顎頭の運動制限以外に異常は認められない。開口障害の原因が不明なまま、とりあえず顎関節可動化訓練を実施。思いきり行ったが、顎はびくともせず開かないまま。学校は不登校が続いており、母親が入院させてやって欲しいと懇願するため、仕方なく入院させた。それから毎日病室にて可動化訓練を実施するも効果なし。一週間ほど経った頃だろうか、病室の看護師が私の部屋に駆け込んできてこう言った。「先生、今日気がついたんですけど、食事中は普通に口開けて食べてましたよ！！」すぐに病室に行って開口量を計ったが変化なし。母親に連絡し、食事中は口が開いていることを告げたうえで再度病歴聴取。「実は…」と話し始め、娘が性被害にあったことを告白。その後開口障害が生じたという。結果、下した診断は **secondary gain** による心因性開口障害。ただちに地元の市民病院の精神科に転院させた。

(症例 5) 口中が痛い！脳内疼痛メカニズムの不思議

口中が痛いという二十歳過ぎの女性が祖母に伴われて来院。口腔内のどこが痛いのかを尋ねるとぶっきらぼうに全部と答える。口腔内を診察しても、特に痛みの原因となるような所見なし。表情やしぐさから **depression** はありあり。痛みのため何もできないので、毎日自室に引きこもっているという。QOL は最低。口腔内局所には訴えに見合うような異常所見がないことから身体化を疑う。末梢性、中枢性過敏化のメカニズム、不安や抑うつと痛みとの悪循環について時間をかけて説明。トリプタノール投与を開始。それにより痛みはほんのわずかずつだが減少の兆しが見え始める。不安や抑うつが著しいため、精神科受診を勧めた。その後、どういう訳か予約がキャンセルされ、通院が途絶えた。3 か月ほどたったある日突然一人で来院してきた。診療室へ入ってきた姿を見て目を丸くした。そこには顔に満面の笑みを浮かべた、すっかり元気な若い女性が立っていた。痛みはと尋ねると今はまったくないとのこと。今日は嬉しくて先生に報告に来たという。話を聴くと、勧めに応じて精神科を受診したところ、入院を勧められて入院し、カウンセリングと薬物療法を受けたとのこと。たまたま同じ病院に同じような症状に苦しむ年代の女性が入院していて、その女性と毎日いろいろな話をし、お互いに悩みを打ち明け合うようになり、それにもものすごく救われたと語ってくれた。その女性と知り合ってから急速に体の調子がよくなっていったとのことであった。会話による精神面のカタルシスで不安や抑うつから解放されて身体化による痛みが消えたものと推測された。改めて中枢の疼痛メカニズムの不思議を感じた症例であった。

【思い出の一枚】



写真上段：左より峯 篤史，前川 賢治，窪木 拓男，私，完山 学（敬称略）。
写真下段：Charles Greene 先生。

写真は、稀代の論客 Prof. Charles Greene を岡山大学に迎え、ご講演をいただいたあと、教室の有志たちとともに打ち上げに行ったときのショット。

ご存じのように、TMD 関連の臨床分野は魑魅魍魎が跳梁跋扈するきわめて特異な分野である。現在でも複数の‘教団’とでもいえるような団体がそれぞれに TMD の診断・治療に関する‘教義’を唱え、‘信者’のリクルートに努めている。Greene 先生は、以前よりそうした状況に強い危機感を抱き、そのような団体に毅然と対峙し、駆逐すべく活動されてきた。たとえば 2010 年に AADR から出された TMD に関する Policy Statement は Greene 先生が主導した啓発活動の一つである。打ち上げは、

そのような団体がいかにサイエンスから離れた教義を唱えているかを先生に熱く語っていただきながら、TMD の医療がいかにあるべきかについて談論風発を 3 時間余りにわたって続けるきわめて思い出深い場となった。

【口腔顔面痛を勉強しようと志す若手へメッセージ】

若い先生方には、真実是何か、エビデンスはあるかを見通す目をもつことの重要性を伝えたいと思います。現代は情報社会で、真実ではない、エビデンスのない情報が世の中には溢れています。偽の情報に踊らされてはいけません。医療の世界では、それは患者の不幸に直結してしまうことをよく肝に銘じてください。

【矢谷博文先生のプロフィール】

【プロフィール写真】



【略歴】

1980 年 大阪大学歯学部卒業
1984 年 広島大学大学院歯学研究科単位習得退学
1996 年 文部省在外研究員（米国ケンタッキー大学歯学部 Orofacial Pain Center）
2000 年 岡山大学歯学部教授
2003 年 大阪大学大学院歯学研究科教授
2020 年 大阪大学名誉教授

【所属学会】

日本口腔顔面痛学会 名誉会員
（指導医，専門医，認定医）
日本顎関節学会 指導医，専門医
日本補綴歯科学会 元理事長，名誉会員
（指導医，専門医）
日本接着歯学会 元理事長，名誉会員（認定医）
など多数

【趣味】

釣り，ガーデニング，料理，
音楽鑑賞（Jazz, LGM）など

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp